平安京右京三条一坊六町跡（藤原良相（よしみ）邸跡）発掘調査広報発表資料

2020年6月23日

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

所在地：京都市中京区西ノ京小倉町101、102、103、105
調査期間：2019年12月9日～2020年7月30日（予定）
調査面積：面積2,850㎡（1区660㎡・2区635㎡・3区1,170㎡・4区385㎡、現在3・4区調査中）

1. はじめに

調査地は平安京右京三条一坊六町跡にあたる。調査は、佛教教育学園二条西校地整備計画に伴うもので昨年の12月より開始した。調査は4つの調査区に分けて進めており、現在3区の南半と4区の調査中である。

平安京右京三条一坊六町跡は、平安時代前期の貴族、右大臣藤原良相（813～867）の邸宅跡（「西三条第」「百花亭（ひゃっかてい）」）であることが文献史料や発掘調査によって判明している。発掘調査は1982年の1次調査から数えて今回が11回目となる。これまでの調査で邸宅内の建物跡や東西2つの池跡などを確認している。2011年の10次調査では、東側の池（池250）から「三条院鈎（つり）（釣）殿高坏（どのたかつき）」銘や仮名文字が記された墨書土器が出土している。

2. 調査の成果

藤原良相邸の時期である9世紀後半の主な遺構は、池（池750）、東西2つの池を接続する溝（溝599）、掘立柱建物（建物1・2・4）などがある。

池750　池の北東部を検出した。検出長は南北が15m、東西が7m、深さは0.4mである。池の岸部は4～7度の緩やかな傾斜で、3～10cmの礫を約2.7mの幅で丁寧に敷いて洲浜を作っている。出土した土器から池は9世紀中頃に造られ、10世紀中頃に廃絶したことがわかる。

溝599　池750と東側の池250（10次調査）をつなぐ東西方向の溝である。溝の検出長は20m、幅は1.2m、深さは0.4m、10次調査検出分を合わせると総延長は48mとなる。水は、地形の勾配により池250からこの池750へ向かって流れ、池750の北東部から注ぎ込んでいる。

掘立柱建物（建物1・2・4）　建物1・2は、共に身舎が2間×5間で南に庇の付く掘立柱建物で、柱間は身舎部分2.4m、庇部分が2.7mで、東西12m・南北7.5mの90㎡となる。この2棟の建物は、規模が同じで位置が重なっていることから、同一建物の建て替えと考えられるが新旧関係は不明である。建物4は、10次調査で検出した楼閣状建物の西端部で、今回、西庇となる5基の柱穴を検出した。柱間は約2.1mである。

3. まとめ

今回の調査で、1町四方（一辺120m、14,400㎡）の藤原良相邸の北半をほぼ調査したことになる。邸宅には東西2つの池があり、それぞれ規模と意匠が異なっている。今回の調査で検出した池750は、これまでの調査（3・7・9次調査）成果と併せて、規模は東西約43m・南北27m以上であることが判明した。平安京内の発掘調査で確認している同時期の池の規模としては屈指の規模である。また曲線を描く岸部には洲浜を施し、その延長距離は75m以上にも及んでいる。庭園は非常に優美な姿であったことが分かる。

これに対して東側の池250は、東西18m・南北24mで平面形はほぼ長方形である。岸部は池750と較べると急傾斜で洲浜は無く、深さは0.9mに達する。平安京内の邸宅の池の深さが通常0.3～0.5mであることからすると、特異な意匠と深さを持つ。溝599は、池250の池底より0.6mほど上に流出口を設けており、この池の上澄みを流していたと想定できる。一方、池750への注ぎ口には小さな土手状の立ち上がりがあり、ここでもオーバーフローした上澄みが注ぎ込むように工夫をしている。このように池250と溝599には水を浄化する機能が付加されており、これによって邸宅内に清らかな水の流れを造りだしている。平安京の邸宅で、この様な構造による流れが確認されたのは初めてのことである。良相邸は、2つの池と流れの存在という庭園を重視した邸宅構造であったことが明らかとなった。

池750は、規模と洲浜などの意匠から邸宅内の主要な庭園の池と考えられる。一方の池250は、その位置と構造から、より私的な空間に設けられた庭園の池であった可能性がある。また、池750は10世紀中頃まで、良相以降の邸宅にも存続するが、池250は9世紀後半には埋没しており、両者の性格の違いを反映していると思われる。

建物1・2は、その位置から池750と密接な関係があることが分かる。しかし、1町規模邸宅の主殿としては建物規模が小さく、主殿は別にあると考えられる。平安貴族の住宅様式である寝殿造は10世紀以降に成立するとされ、そこでは主殿は池の北側に配置しており、9世紀後半の良相邸とは異なっている。今回の調査成果は、居住者が判明していることと併せて、寝殿造の成立過程を考える上でも重要である。

なお、池750と溝599、建物4は佛教教育学園によって地中に保存されることになった。

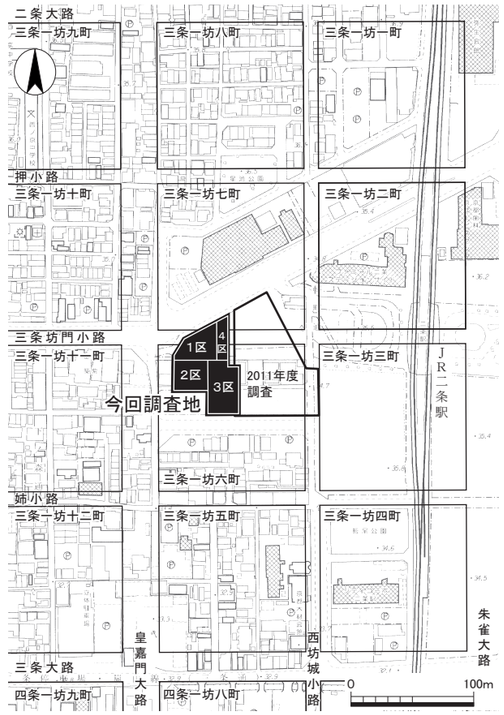

図1　調査位置図（1:5,000）

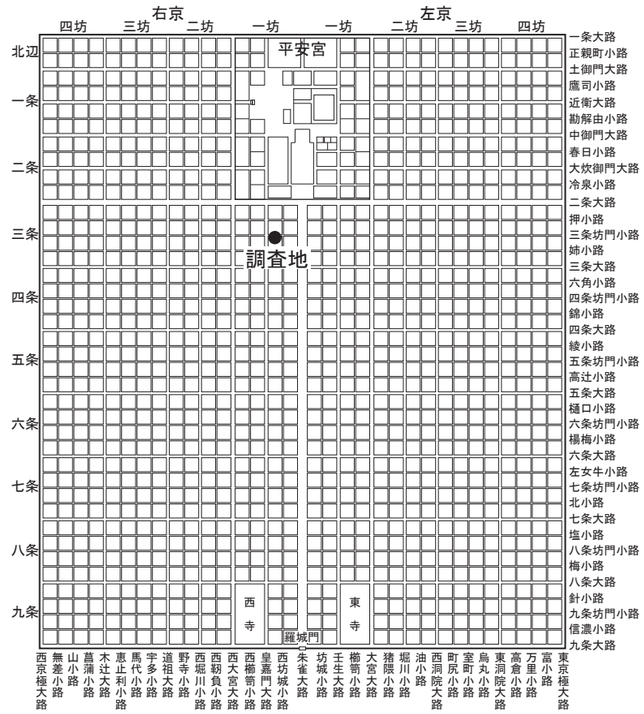

図２　平安京における調査位置

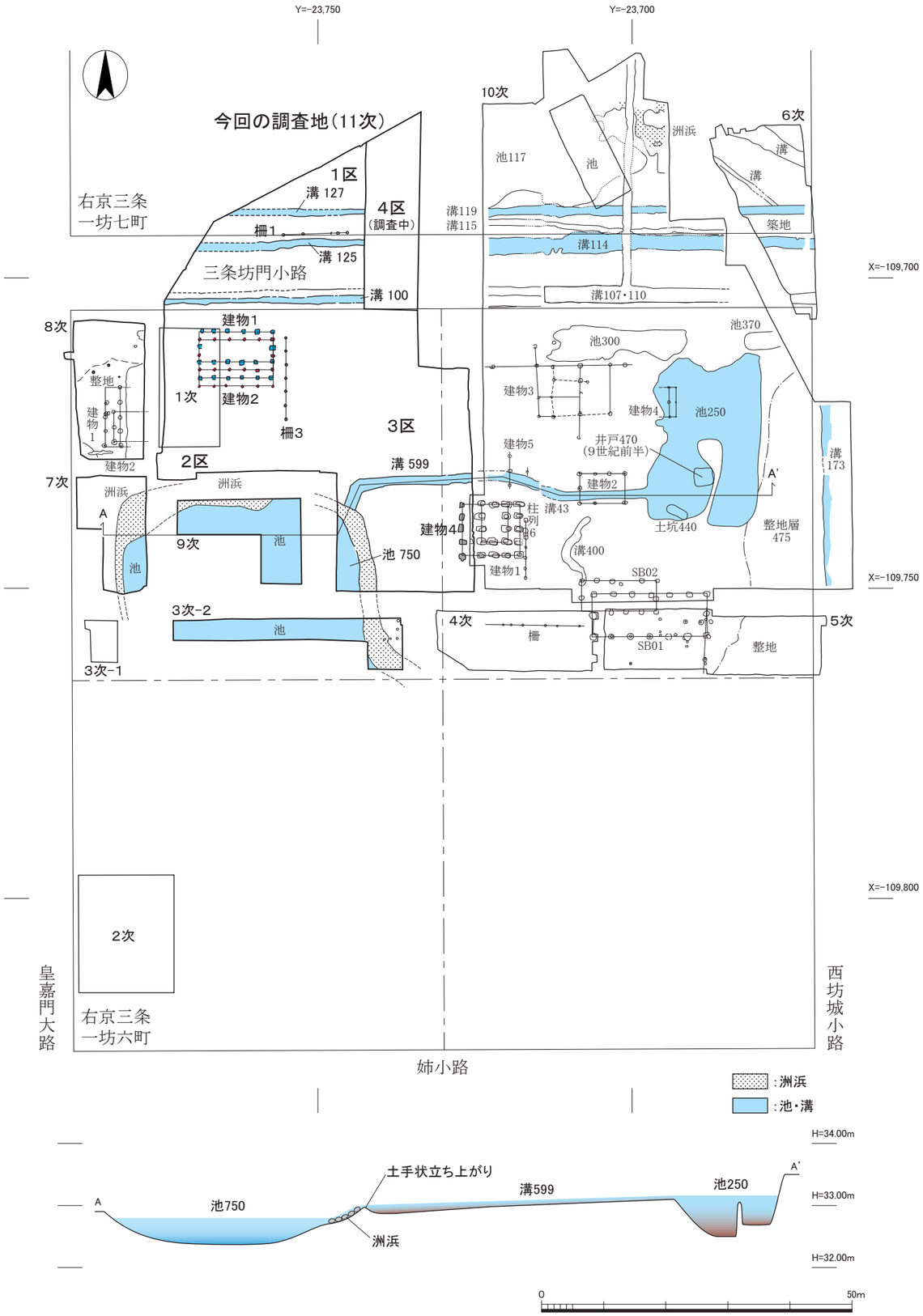

図3　調査位置図(1:800)、池・溝断面模式図(縦1:80、横1:800)

藤原良相略年譜

年	西暦	事柄
弘仁四年	813	藤原冬嗣の第五子として生まれる。
天長十年	833	仁明天皇即位。藤原順子(実姉)、女御となり従四位に叙される。
承和元年	834	蔵人に任ぜられる。
承和二年	835	右兵衛権大尉に任ぜられる。
承和三年	836	内蔵助に任ぜられる。
承和五年	838	従五位下に昇進。
承和六年	839	内蔵頭に任ぜられる。
承和七年	840	因幡守・左近衛少将に任ぜられる。
承和九年	842	承和の変に際し、近衛兵40人を率いて皇太子の直曹を囲む。
承和十三年	846	従四位下に昇進。左近衛中将に任ぜられる。
嘉祥元年	848	参議に昇進。
嘉祥三年	850	従四位下に昇進。陸奥出羽守按察使・左大弁兼春宮大夫に任ぜられる。
		仁明天皇が没し、文徳天皇が即位する。藤原順子が皇太夫人となる。
仁寿元年	851	従三位に昇進。権中納言に任ぜられる。
仁寿四年	854	権大納言兼右近衛大将に任ぜられる。藤原順子が皇太后となる。
斉衡二年	855	正三位に昇進。
斉衡四年(天安元年)	857	従二位に昇進。右大臣・左近衛大将に任ぜられる。実兄の藤原良房が太政大臣になる。
天安二年	858	文徳天皇が没し、清和天皇が即位する。
貞観元年	859	正二位に昇進。
		四月十八日　皇太后藤原順子が東宮より西三条第に遷る。
貞観二年	860	四月二十五日　皇太后藤原順子が東五条宮に遷る。
貞観六年	864	娘の多美子が清和天皇の女御となる。
貞観八年	866	三月二十三日　清和天皇が藤原良相の西三条第(百花亭)に行幸する。
		閏三月十日　応天門と左右の楼閣が焼亡する(応天門の変)。
		八月十九日　藤原良房が摂政になる。
		十二月八日　藤原良相、表を抗し、辞職を請う。
貞観九年	867	十月十日　藤原良相没(55才)、贈正一位。

藤原良相　ふじわらのよしみ　(813～67)　平安時代前期の公卿。贈太政大臣冬嗣の第五子で、人臣最初の摂政になった藤原良房は兄に当たる。女の多可幾子は文徳天皇の女御、多美子は清和天皇の女御となった。嘉祥年間(848～51)の初めに参議となり、次いで陸奥出羽按察使、春宮大夫、権中納言、右近衛大将等を歴任、天安元年(857)右大臣に昇進した。貞観八年(866)の応天門の変に際しては、兄良房と水面下の争いを繰り広げるなど政治家として辣腕を振るう一方、文学を愛し仏教にも通じて、自活不能の一族子女のために延命院・崇親院を設立し、その扶養・助成に意を用いた。度量が広く才弁に富み民政に尽力したと称され、在官中は『貞観格式』の編纂に従事し、また兄良房や伴善男らとともに『続日本後紀』の編纂も手掛けた。(「平安時代史辞典」角川書店1994年より、抜粋。)

『前賢故実』巻第4　菊池容斎著
国立国会図書館蔵より

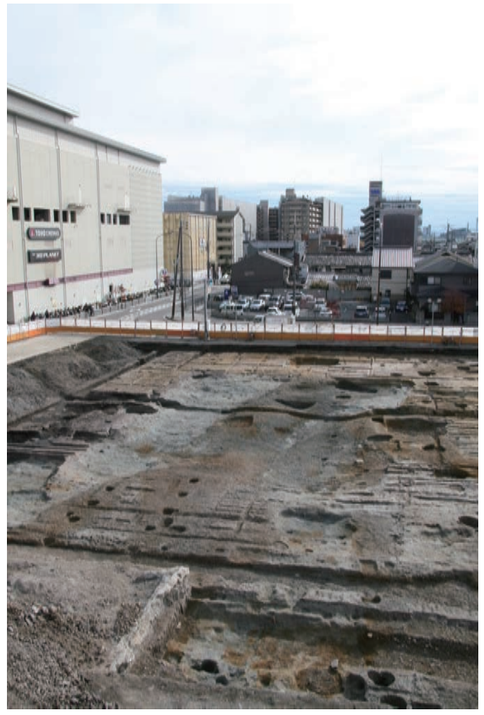

図4　10次　池250(北から)

図5　11次　池750東岸部(北東から)